「……さあ、いきなりさう言はれても、僕には分からないが――何しろ大きな問題だから――でも、戀愛の極致はやつぱり死ぢやないかと思ふね。この人間社會に生きてゐて、戀愛の目的が完全に遂げられようとは思はないね――戀愛の當事者は人間だが、戀愛の場所は人間社會ぢやない。例へば、見給へ、この社會に生きてゐて、至純に始まつて至純に終つた戀愛が、昔から今までに一つでもあるだらうか。典型的な戀愛傳說の終局はみんな『死』ぢやないか。成程、近松の心中物などを見ると、『死』の動機は必ずしも純ぢやあないかも知れない。女の立場から見れば、『治兵衞はいづれ戀か名か。忠兵衞も名の爲に果つ』かも知れないが、僕は治兵衞だつて忠兵衞だつて、名だけで死んだとは思はないね。名もはひつてゐるかも知れないが、戀が一番高いところにあつたんだ。人間、名だけぢやあなかなか死ねないものだよ……」

三澤は近松とシエエクスピアの愛讀者で、戀愛至上を主義としてゐた――山田もつい十日前まではそれだつたのである……併し、今の山田は、もう考へが違つてゐた。

「ぢやあ、君は何か――僕が死ねば好いと思つてゐたのか……」

「さあ、そこが人生に矛盾のあるところだ。君が若し戀愛に純だつたら、死ななければならなかつたと思ふ――なぜと言へば、この人間社會は決して至純な戀愛を許すところではないのだから。併し、友人としての僕は、決して君を殺したくない。君に死なれたら、僕の人生は廢殘だ。若し、君が死なうとするところを僕が見たら、僕は腕力をもつても君を留めたらうと思ふ。つまり僕は、戀人としては君に死んで貰ひたかつたのだ。併し、友としては君に死んで貰ひたくなかつたのだ……」

「ぢやあ、僕はどうしたら好いのだ……」

「さあ、それが僕には分からないのだ……」

「ところが、それが僕には分かつたのだ。戀愛の當事者としての僕にも、君の友人としての僕にも、矛盾のない生き方があるのだ……」

「ふうむ……君はそれを森川先生のところで學んで來たのか……」

「學んで來たと言つては當らない……靈的に傳へられて來たのだ。」

「その靈的に傳へられて來た生き方といふのはどういふのだ……」

「決して死んではならないといふことだ――飽くまでも生きなければならないといふことだ……」

「戀愛にも死んではならないのか――社會に戀愛を蹂躙されても生きてゐなければならないのか……」

「さうだ――戀愛の極致は『死』でなくて『生』だ……しかも『永生』だ……自殺は永遠に『生』を斷ち切つてしまふ……『永生』にはひるには、この世の『生』を完全に成し遂げなければならないのだ……」

「この世の『生』を完全に爲し遂げるとは……」

「どんな苦しいことがあつても、堪へて生きて行くのだ。どんなに社會から虐められても、それに負けずに生きて行くのだ。決して死んではならないのだ。血だらけになつても、傷だらけになつても、生き續けて行かなければならないのだ……」

「若し、殺されたらどうするのだ……」

「それこそ殉教者だ……自殺者の魂は救はれないが、殉教者の魂は救はれる……救はれた魂は永生にはひることが出來る……」

「だが、どうして、そんなにまでして――この僞善と虛僞に滿ちた社會に生きてゐなければならないのだ……葉をむしられ、花をもがれた『戀愛』を、どうしてそんなにいつまでも持ちこたへてゐなければならないのだ……死んで、その葉を、その花を、誰にも手の觸れられない場所へ移してしまふ方が、どんなに戀愛に忠實だか分からないぢやないか……」

「自殺に依つて、果してそれが成し遂げられるだらうか……僕のいふ『永生』にして始めてそれが出來るのだと僕は信じてゐる……『永生』は靈化せられた新しい生だ――むしられた葉も亦生えて來る。もがれた花も亦咲いて來る……そこに、始めて永遠無窮の愛があるのだ。生き續けるといふこと、諸惡と鬪つてこの世の『生』を生き通すといふことが、その『永生』の約束になるのだ。短い――極めて短い――この世の生をさへ『生』き通すことが出來ないものに、どうして無窮無限の『永生』が約束されよう。自ら命を絕つといふことは詞通りに自ら命を絕つのだ――永遠に生きることの出來る生命を自分で斷ち切つてしまふのだ。戀愛の極致が若し無窮無限な愛だとしたら、戀人同志は『永生』に向つて進まなければならないと思ふ……『死』は一時の高潮に過ぎない。灼熱に過ぎない。爆發に過ぎない……『生』なしに『永遠の命』はない。『永生』は熱でもなければ、爆發でもない。水の流るる如く總てを至上者に一任した生活だ……火はぢきに消える。水はいつまでも流れる……」

「至上者といふのは神のことだらう。併し、僕にはまだ神といふものが分からない……君はさつき『救はれた』とか『救はれつつある』とか言つたが、君が救はれたのは果してさうした信仰から救はれたのだらうか。僕はそれを疑はざるを得ない――僕の考へに依ると君が救はれたのは、君が戀を諦めたからだ。愛を捨てたからだ。若し、さうだとすると、僕は君の眞心の爲にそれを悲しまなければならない――僕は君が七年來自分の生命として來た愛を、さう無造作に捨てて貰ひたくはなかつた……」

「いや。僕は決して自分の愛を諦めもしなければ、捨てもしなかつた…現世に於ける肉體の一致は絶たれてしまつたが、神以外に手を觸れることの出來ない魂といふものが永遠に僕等を結びつけてゐる…僕はやつとそれを信ずることが出來た…それを信ずることが出來て、始めて僕は救はれたのだ…」

「でも、君はさつき人生の極致は戀愛ぢやないと言つたぢやないか…」

「如何にも言つた——さうして、今の僕はさう信じてゐる…併し、僕は戀愛を否定しはしない…」

「それぢやあ、君は戀愛をどういふ地位に置くのだ…」

「さあ。どういふ地位に置くと訊かれると困るが…兎に角、戀愛が人生の總てではないと思ふやうになつた…戀愛が人生の最も貴いものだとは思へなくなつたのだ…人間の愛には、親子の愛もある、兄弟の愛もある、夫婦の愛もある、友人間の愛もある…いづれも人間同志の愛である以上、不完全な愛たるを免れない…戀愛もやはりその一つで、到底理想的に完全純眞を期することは出來ないのだ…」

「さうすると、世の中に完全な愛といふものはないわけなのだね…」

「いや、一つある——唯一つある。それは神に對する人間の愛…いや、人間に對する神の愛だ——さうだ。人間の愛に完全なものは一つもないのだ。完全なのは、唯、神の愛だけだ…」

「神の愛…成程…併し、神の愛といふやうなものは、まだ僕には分からない。僕は愛といふものを抽象的に考へることは出來ない。手で摑めるもの…兩腕で抱きしめることの出來るものでなければ、僕は愛だと思ふことが出來ない。神の愛といふやうなものが、果して手で摑めるだらうか。兩腕で抱きしめることが出來るだらうか…」

「出來ると思ふ…眼で見ることも出來れば、手で觸ることも出來る…神の愛といふものは、決して抽象的の觀念ではない…具體的な事實だ…小さく言へば、百合の花一つ見ても、神の愛は分かると思ふ…大きく言へば、世界の歴史だ…歴史は取りも直さず神の愛の記錄だ…その歴史の中で、最も神の愛の高調せられて現れたのが基督の死だ…十字架だ…」

「さあ、それだ…それは基督敎の信仰だらう。成程、君は森川先生の講義に導かれて、既にその信仰を得たかも知れないが、僕は不信者だ。それは、僕だつて人間以上の『存在』を認めないではない。殊に、僕は自然の熱愛者だ。自然の内には確に神を認める。草の葉が一枚芽をふくにも、木の葉が一枚散るにも、僕は至上者の手を認めないではゐない…併し、それは甚だおぼろげなものだ。殆ど抽象的な觀念に等し

いものだ。人類の歴史に神の手を認めるとか——基督の十字架に神の愛の最高調を見るとかいふことは、僕には全く不可能なことだ…僕は漢學者の子に生れた…小さい時から僕の心を支配したものは、何といつても儒敎だ…その次ぎに僕を支配したものは、母が信じてゐた佛敎だ…勿論、僕は母から直接それを說かれたのではない…併し、僕の母の墓は普通の日本の寺にある。僕は今までその墓を母だと思つて暮らして來た…その上、母の信仰の深かつたことに就いては、度々寺の住職から話を聞かされてゐる…僕の心はどうしても佛敎臭くならずにはゐなかつた…基督だとか耶蘇だとかいふことは、なんだか日本人ばなれのしたことのやうに思つて來た…西洋の詩を研究するやうになつてから、その考へは餘つ程變つて來たが、併し小さい時から頭に泌み込んでゐる儒敎と佛敎の混淆したやうな觀念は、容易に僕を去らないのだ…君だつて、つひこなひだまではさうだつたと思ふ。確にさうだつた。さうでなかつたとは言ふまい…」

「そりやあさうだ。君はよくお母さんのお墓の話をした。僕もよく親父の墓の話をした…僕の親父の墓があんまり遠くにあるので、僕はめつたに墓參の出來ないことを嘆いた…さうして、君のお母さんのお墓の東京にあることを羨んだ…僕はよく君と一緒に君のお母さんのお墓參りをした…さうして、墓と墓との間には、どんなに距離があつても聯絡があるやうなことを言ひ合つて、僕が君のお母さんのお墓參りをすることは、取りも直さず自分の親父の墓參りをすることだなどと言つたもんだつけね…併し、もうさういふ痴人の夢は僕には何の力もないものになつてしまつた…僕は變化した——確に變化した。キタ、ヌオワへはひつたといふことは言へないかも知れないが…少くとも僕は變化した——變化といふものは急激に來るものだね…實に急激に來るものだ…」

三澤は併し、山田がさう急に變化する氣づかひはないと思つた。勿論、基督敎に關する思想にも同感は出來なかつた…

「どうも僕にはよく分からない…君は熱する人だから、森川先生の說敎に動かされて、今は一圖にさう思つてるのだらうと思ふが…もう少し經つて、冷靜になつてからでないと、ほんとの話は出來ないやうに思ふね…」

「いや。そんなことはない。少くとも僕は十日間千駄ヶ谷へ通つた…成程、その間には熱したこともあつた…激したこともあつたらう…併し、十日經つ間には、相當に冷靜にもなれたと信ずる。僕は決して一時の感情に驅られて、こんなことを言つてゐるのではない。知にも情にも意にも相當に訴へて考へて見た結果がこれなのだ。勿論、信仰はまだ淺い。基督敎に關することも、まだ分かつてゐないことが多い…

併し、僕にとつての動かすべからざる『事實』は、僕が救はれたといふことだ……少くとも救はれつつあるといふことだ……」

「成程、それは君にとつては事實だらうが、僕にとつてはまだ事實ではない……僕は僕以外の人間がどう精神的に變化したつて、直ぐそれを事實だと斷ずることは出來ない……」

三澤は山田に對して十分同情を持つてゐたが、いつまで立つても山田の言ふことを理解することは出來なかつた……

「……一つ林のところへ二人で行つて見ようではないか……林も君のことは心配してゐた……あいつは北海道のお父さんが基督教の信仰を持つてゐるんだし……妹だつてミッションの學校にゐる關係から、僕よりはその方の理解がある筈だし……僕も先生の說を聞いて見て、その上で又考へ直して見たいから……」

三澤がかう言ふと、山田は直ぐに贊成した。

「さうだ。僕もどうせこれから林のところへ行かうと思つてゐたのだから……丁度好い……君と一緒に行かう……」

さう言つて、二人は一緒に三澤の家を出た。

林は一番町の高臺に住んでゐた。和洋折衷の住居で、林の部屋には北海道風に圍爐裏が切つてあつた。三人はよく冬寒い時分に、圍爐裏の火を圍んで話した……併し、今そこには灰があるばかりだつた……

林は中學時代からの山田の親友であつた。

山田が坊ちやん育ちで、中學の卒業間際になつても、一向將來の方針が立つてゐなかつたのを、山田の才能と傾向に考へて、文科の方へ導いたのも林だつた。讀むべき書物、考察すべき問題についても、山田は常に林の指導を待つた——林は山田より一つ上に過ぎなかつたが、實際に於いては二つも三つも上の兄さんのやうだつた。

併し、林はその色の白さ、眼の涼しさ、齒の美しさとは不似合に、決して「優しい兄さん」ではなかつた。林は常に山田の意志の薄弱なことを叱つた。山田の內生活の貧しいことを責めた——「强くなれ。」「豐富になれ。」「公明に。」「正大に。」「男らしく立て。」林はさう言つて、絕えず山田を笞うつた。

山田は寧ろ林を恐れた——少しの卑屈さ、少しの僞善、少しの虛飾も林の前では許されなかつた。併し、山田は林の前へ出る時、きつと何か叱られるやうな種を持つてゐた。或場合には、自分には氣がつかないでゐることで、林に突かれて始めて痛みを感ずるやうなこともあつた……

しかも……それでゐて……山田は林を愛した。尊敬もした——どんなに烈しいことを言はれても、それが林だと腹は立たなかつた。腹が立たないどころではなかつた。林に少しでも何か言はれると、いつも山田は鬱ぎ込んでしまつた……

併し、けふの山田は今までの山田ではなかつた……山田は

もう自分で偉大な力の據りどころを得たと信じてゐた……既に三澤とも多少の論戰を重ねて來た……勿論、林が三澤以上の論客であり、三澤以上の强い人格であることは知つてゐたが、山田は少しも恐れなかつた……山田は進んで今の自分を林の前に呈露しようとした……

「やつと遣つて來たな。失戀詩人。一體、今まで何處をうろついてゐたんだ。」

林はいきなりかう言つた——思ひ切つて冷笑しながら……

「森川さんの講習會へ行つてゐたんださうだ……」

三澤が引き取るやうにして、かう言ふと、

「ああ、さうか。神の愛か。女の愛に失敗して、神の愛を求めに行つたのだな……どうだ。神の愛は見つかつたか……なかなか見つかるまい……ダンテのやうな偉い人でも、そいつを見つけるまでには、相當に苦勞したらしいからな……それとも、君のことだから、いつもの極めて簡短に見つけたかも知れないな……どうだ。神の愛の味は。やつぱり女の愛の味の方が好いだらう。第一、神樣といふ奴はコロリンシヤンなどはやらないからな……」

……山田の失つた戀人は好んで琴を彈いた。山田はその琴の音を慕ひながら、屢戀人の家の周りをさまよつた……林はそれをよく知つてゐた……

「まあ、さう冷かさないでくれ給へ……僕はまじめで來たんだ……まじめにその後の話を聞いて貰ひたいと思つて、やつて來たんだ……」

山田が興奮してかう言ふと、林は愈落ちついて言つた——

「まじめ、結構。僕もまじめだ。僕の何處にまじめでないところがあるね……なんなら指摘して貰はうか……僕から見ると、君の方が餘つ程不まじめだ……嘘で固まつてゐるやうに見えるね……第一、そのまじめくさつた救世軍づらが嘘だ……」

山田は頭ごなしにやつつけられたが、それでも腹は立てなかつた……何と言はれても僞方がない。今までの自分が悪いのだ……今までの自分が、今の自分を笞うつてゐるのだ……過去が現在に煩ひしてゐるのだ……自分は過去と斷絕したつもりでも、世間は自分にいつまでも過去の著物を著せようとするのだ……

それに、林の詞の烈しいのは、或は神が自分を試驗してゐるのではないかと思つた……自分を怒らせて、林にぶつからせて、何も彼もめちやめちやにしてしまふつもりか……さもなければ、一度に氣を落させて、自分から絕望の境へ身を退かせてしまふつもりか……いづれにしても、山田はそれに打ち克たなければならないと思つた……

「僕は何と言はれても、決して怒りはしない。惡口を言つて、君の腹が癒えるなら、いくらでも言ひ給へ……僕は甘んじて

的になるから…」

山田が靜にかう言ふと、林は直ぐとその詞に搦んで來た…

「冗談ぢやない…僕は私憤などを洩らしてゐるのぢやない…僕はそんなけちな男ぢやない…僕は君のその行ひ澄ましたやうな聖人顏に對して公憤を感じてゐるのだ…君がまだ自分のものでもないものを、自分のものだと勝手にきめてゐる、その厚顏さに腹を立ててゐるのだ…」

「だから、若し僕に嘘があるなら、その嘘を引つ剝いでくれ給へ。僕自身としても、決して嘘でゐたくはないのだ。唯、僕は今の僕を、そんなに嘘ばかりだとは思つてゐないのだ。僕は可なり眞劍なコンワアジョンを經て來たつもりだ…併し、それも他人から見れば、どうだか分からない…僕は決して僕ひとりで慢つてゐるのではない…君のいつもの鋭い觀察で忌憚なく批判してくれ給へ…次第に依つては、僕は出直しても好いのだから…」

「よし。君はなかなか勇氣のあることを言ふやうになつた…それだけでも、僕は嬉しい…併し、僕にはどうしても今の君がほんたうの君だとは思へないのだ…僕は基督敎の信仰を持つてゐる親父や妹を持つてゐる…三澤や君とは違つて僕は子供の時から主エス、キリストを說かれた…だが、僕は親父や妹の行爲を通して見た基督敎といふものにはどうしても服することが出來なかつた…いまだに服することが出來ないでゐる…森川先生といふ人も、僕の親父などは非常に崇拜してゐるが、僕には極めて心の狹い詩人の一人だとしか思へない…成程、人を動かす力は持つてゐる。現に僕だつて、あの人の本を讀んで、幾度感激したか分からない…併し、あの人が果して基督敎の全部だらうか…あの人には第一博大な愛が缺けてゐる…ユダヤの神の峻烈さはあつても、淫賣婦に滿腔の同情を寄せる基督の愛には缺けてゐる…詩人としての彼はそれでも許されるが、宗敎家としての彼はそれでは許されない…例へば、最近の『東京インデペンデント』解散事件だ…若し、どんなに森川氏がひどい目に會つたとしても、相手はみんな自分より後輩だ…博い、深い、寬容な愛があれば、ああした結果にはならないで濟んだと思ふ…」

林はその邊の事情にも可なりよく通じてゐた。たとへ、その觀るところに誤りがあつても、山田はそれが嬉しかつた。山田は兎に角最後まで林の說を聞かうとした…

林は詞を續けた——

「…山田君。一體、君は人に影響せられ易い性の人間だ。忌憚なく言へば、君にはオリジナリチイといふものが缺けてゐる。キイツを讀めば、直ぐキイツに影響される。シエリイを讀めば、直ぐシエリイに影響される——それは、君が或一

人の詩人に心醉してゐる最中に、君が書いた詩を見れば、直ぐに分かることだ。極端に言へば、君の生活は獨自の生活ではなくて、影響の生活だ。君は自分自身の生活といふものを持つてゐないのだ。君が持つてるのは他人の生活の反映だけだ…實を言ふと、君が森川さんのところへ通つてゐたことも、或方面から聞いて、僕は前から知つてゐたのだ。講習會に於ける君の行動なども巨細に僕は知つてるのだ…さうして、僕は、君が兎に角そこまで行つたのを豪いと思つてゐた…弱蟲の君が、僕等にも相談しないで、單身さういつた世界へ道を求めに出かけたといふことは、君としては確に一進歩だ…その點は僕も喜んでゐた…併し、結果は大抵知れてゐた。君といふ人間をよく知つてゐる僕として、君の上に起る變化は大慨分かつてゐた…成程、僕はまだ君自身の口から、まだなんにも聞いてはゐない…併し、君が今三澤と一緒にここへはひつて來た瞬間、君の顏つきを見て、僕は自分の想像の間違つてゐなかつたことを知つたのだ…君の顏つきは、成程今までの君の顏つきとは變つてゐた…併し、それは君自身の顏ではなかつた…他人の顏だ。他人に影響せられた顏だ。他人の顏を君が冠つて來たのだ…君自身の內部には何の變化もなくて、唯君の表皮が變色しただけだ…」

山田は林の詞を初めは冷淡に聞いてゐた。中ごろは侮蔑して聞いてゐた。その內に、だんだん引きつけられて來て、しまひにはまじめに林の言ふことを受け入れるやうになつた…

顏つき一つで現在の自分を判斷するとは、隨分殘酷なことだ。併し、敏感な林には、唯それだけで總てが分かるのかも知れない…成程、自分は獨自性に貧しい人間だ…それは今までも屢人に言はれてゐる…自分自身でも十分に認めてゐる…いつも人に影響せられてばかりゐて、一向確な自己といふものを持つてゐない…風に吹かれる蘆の葉とは全く自分のことだ…

自分は變つた…確に變つたと信じてゐる…併し、林に言はせると、自分の變つたのは表面だけで、內部は相變らず元の自分だ…元の卑屈な、虛飾に富んだ、人生觀上の基礎のない自分だ…成程、それはさうかも知れない…成程、それは顏つき一つで、直ぐ知れることかも知れない…

實際、自分が得たと思つた信仰も、講習會の終り時分には、甚だ薄弱な信仰だといふことが分かつた…まだ自分は本當に基督を知つてゐるのではない…基督の前に心を虛にして、基督の總てを受け入れてゐるのではない…死生の間を潛つて來た經驗も、單なる人間の經驗に過ぎないかも知れない…魂には何の干係もない——魂の更生には何の關りもない——俗人の經驗に過ぎないかも知れない…

さう思つて來ると、山田はもう一言も林に對して抗辯することが出來なくなつた。林の詞の前に身をひれ伏して、自責と反省に心を悶えるより外にしやうがなかつた……三澤の前では獅子のやうだつた山田も、林の前では鼠のやうだつた……

「林君の言ふことは可なり強く僕の急所を突いた……成程、僕は單に影響せられてゐるのかも知れない、……眞のコンワアジョンにはまだ到達してゐないのかも知れない……勿論、僕自身だつて、今の僕の信仰を決して誇つてゐるわけではない。……唯、僕は救はれたと思つたのだ――少くとも救はれつつあると信じた、その歡びを君達二人に頒けに來たのだ……併し、だんだん林君の話を聞いてゐる內に、それさへ怪しくなつて來た……僕はまだ救はれてゐないのかも知れないのだ……救ひの端緒にさへ着いてゐないのかも知れないのだ……森川先生に關する林君の批評については、たとへ十日間でも實際に師事した僕として、多少の抗議もないではないが、それは今はいふまい……今、僕の眼の前にあるのは、僕自身の問題で……一つ、歸つて、靜に考へて見よう……考へて見た上で、また君達に會はう……さうして、向後の問題に就て相談をして貰はう……實際、僕はなつてない男だ……それが爲に始終君達に心配ばかりかけてゐる……濟まない……ほんとに僕は濟まないと思つてる……」

山田はかう言ふとしよげ返つて林の家を出た。勢込んで三澤の家へ飛び込んだ時の樣子とは似ても似つかぬ萎れやうで坂を上がり降りする足もたどたどしく、やつとのことで自分の家へ着いた……

自分の部屋へはひつて、机の前へ坐ると、山田は自分で考へようとしないで、いきなり森川先生の著書を讀み始めた――勿論、一つの書物を落ちついて讀むのではなかつた。こつちの本を三四頁讀むかと思ふと、直ぐ又あつちの本を五六頁走り讀みした……山田は今の自分に對する「答」を求めた――「答」を他人に漁り求めたのである……

「强き信仰と弱き信仰」……山田は最後に、かういふ題の文章にぶつかつた……

「……信仰は元來意志の動作であつて、結果の有無に由るものではない。信ずべきは結果の有無に拘らずして信じ、信ずべからざるはたとへ天地が壞るるとも信じないといふ信仰――その信仰が眞正の信仰である。故に信仰は目を其結果に注がないのである。『我等見る所に憑らず信仰に憑りて歩む也』とパウロの言ひしは此事である。目を結果に注ぐに至つて、信仰は信仰でなくなるのである。結果を見ることなく、結果を俟つことなく、信ずべきを信じ、これを信じて充ち足れる事、その事が眞の信仰である……」

山田はもうこれだけで、林の議論の大部分が毀れてしまつ

たやうに感じた……

先生は更にかう書いてゐる――

「……基督信者に唯一の信仰の目的物がある。それは基督といふ十字架である。これあれば彼は足りるのである。これなくして、彼は貧弱、世に比なき者である。信者のすべてはイエスとその十字架に於てある。彼の戰も潔も贖もすべてその中にあるのである……信者は基督とその十字架以外に何物をも求めないのである。然り、求むべからずである。彼は全注意をこれに鍾めて他を顧みないのである。人の彼に彼の信仰の理由を問ふ者あらんか。彼は十字架を指して答ふるのである。『視よ』と……」

山田は考へた――結果の有無はこれを見ないとして、果してこの信仰が自分にあるだらうか……基督といふ十字架……今の自分にとつて一番貧弱なのは、この信仰である……たとへ林に突かれた信仰の弱點は逃れ得るとしても、今先生の文章に依つて刺された自分の信仰の弱點は到底隱し終せることは出來ないのである……山田はまた心の沈んで行くのを感じた。

先生は更に又かう書いてゐる――

「……心靈は自我である、主觀である。心靈的實驗と稱するも自分で自分に感じたまでの事であつて、その果して普遍的事實であるや否やは自分一人で定めることは出來ない。潔められたりと思ふことは必ずしも潔められたる事ではない。救はれたりと感ずる者が必ずしも救はれるのではない。永遠の事實は感情以外である。救濟は感情の事ではない、道理の事である。道理を信ずる意志のことである。故に恆星と共に動かざる者である。巖の如くにその根柢を宇宙の眞理に根ざす者である。最も廣き意味に於いての客觀的事實である。故に自我以外に在る事でなくてはならない。世界の歷史として宇宙の現象として、在つた事でなくてはならない……

「實に豫言者エレミヤの言ひしが如くに、心はすべての物よりも僞る者なりである。人は自己の心に賴りて自己を知ることは出來ない。自己の見たる自己は決して眞個の自己ではない。自己が善く見ゆる時に必ずしも善くあるのではない。惡しく見ゆる時に必ずしも惡しくあるのではない。この心理的事實をよく辨へたるパウロは言うたのである――『我自から省みるに過失あるを覺えず、然れどもこれに因りて義とせられず、我を審判く者は主なり。』と……」

山田は愈驚いた――救はれたと思ふことが救はれたのではない……自分の心に賴つて自分を知ることは出來ない……自分で自分の善く見える時に、必ずしも自分は好いのではない――かうなつて見ると、自分は今まで何を信じたのだか、何を基礎として新しい生活にはひつたと信じたのだか、まるで分からなくなつて來た……

山田は思つた――自分は神を信じたのでもなければ、基督を信じたのでもなかつた。極端に言へば、森川先生をさへ信じたのではなかつた……自分は唯自分自身を信じたのだつた……自己、自己、總ては自己だつた。自己以外には、世界の歴史もなければ、宇宙の現象もなかつた……

信仰は結果の有無を論じないといふ詞を讀んだ時、林の議論が一度に崩れたやうに思つて、心窃に痛快を叫んだ山田も、ここへ來て、一溜りもなく敗北してしまつた……林に言はれたことは、やつぱり本當だつた……如何にも自分は「救世軍づら」をした自己欺瞞者に違ひない……他人の信仰をかぶつた假面舞踏者だつたに違ひない……それにしても、林は虚無論者でありながら、何といふ深い洞察力を持つてゐるのだらう――さう思ふと、山田は林が恐ろしくなつた……

先生は又書いてゐる――

「……國家社會に現れたる基督教の效果ではない。また自己の心靈に施されたりと感ずるその感化力ではない。これは以て信者の信仰の基礎となすに足りない。神が豫め供へ給ひし宥和の供物たる十字架上のイエスである。これのみが我が全身全靈を傾けて信賴するに足る者である。その上に信仰を築きて、雨降り大水出て風吹きてこれを撞つとも倒れないのである……善行を急ぐ必要はないのである。社會事業を焦る必要はないのである。必ずしも惡念悉く絶え、自ら清淨潔白俯仰天地に恥ぢざる人となるの必要はないのである。罪の身この儘、惡の世その儘の内に在りて、信者は贖罪の供物なる十字架上のイエスを仰ぎ視て、神の前に善且義且聖たるを得るのである……」

山田は愈自分の信仰の無價値なものであることを悟つた……

小さき墮落

山田の信仰は林の一聲でぐらついた……そこへ小さな誘惑が來た……山田は一溜りもなく、ずるずるとその方へ引きずられて行つた……

山田の友達に、もう一つ他のグルウプがあつた――それは小學校時代の同窓で、唯幼時の親和の追憶のみが互を繫いでゐるに過ぎなかつたが、その團結は存外堅かつた。

春田といふ俊才があつた。海軍兵學校をずつと一番で通したが、はじめての遠洋航海で疫病の爲に斃れてしまつた。寺野といふ數學と語學の天才があつた。外交官試驗に首席で合格して、直ぐ書記生としてウラヂオストツクに渡つたが、寒さに肺を冒されて、極東露西亞の土となつてしまつた――今殘つてゐるのは、烏丸といふ華族の嗣子と、木村といふ財産家の一人息子と、東谷といふ裁判官の三男で、早く父に別れて、母に甘やかされて育つた、いづれも凡才のみであつた。

この三人は小學校時代の成績も惡く、中學へはひつてからも一つの學校に落ちつかず、高等教育も滿足には受けずに、青年としての客氣もなければ煩悶もなしに、唯ぶらぶらと蝶のやうな生活を送つてゐる連中だつた。

勿論、今の山田から見れば、いづれも自分より價値の低い人間だつた――學問も淺く、人生觀も低く、感情も鈍く、意志も弱い連中だつた。併し、山田は決して彼等を侮蔑しなかつた。夢のやうな少年時代の決して二度とは來ない美しい追憶は、これらの友達に對して常に限りない愛着を山田の心に持たせた。殊に忘れようとしても忘れ難い初戀――それは最近破れるまで七年の長い間續いた戀――の周圍に立つ人物として、山田は親しさ懷しさの限りを盡して、これらの友達を愛慕するのであつた……

林に會つてから二三日にして、この幼馴染の一人が山田を訪ねて來た――

「……近い内に、男女混淆の大同窓會を開かうと思ふが、君、賛成してくれないか。學校の先生達にも既に諒解が得てあるし、女子部の幹事達にも既に話がしてあるのだ……」

斡旋家の木村は、山田の部屋へはひつて、座につくが早いか、こんなことを言つた。

「ほう。そいつは素敵なことを思ひついたな。一體、男女が別々に同窓會を開くなんて、もう時代遲れだ……併し、先生達がなかなか嚴しいだらう。君は諒解を得たと言ふが、いざとなると、どうだか分からないぜ……」

山田がかう言ふと、木村は大人らしくぽんと胸を打つた――

「萬事は吾輩の方針にありさ……これで僕は事業にかけては天才だからね……なあに、小學校の先生などを説服するのはわけなしさ……それにしても、吾々は信用がないから、是非とも君に賛成して貰はないと、爲事がしにくいんだ。何と言つても、君は吾々の仲間では一番豪い人なんだから、君さへ賛成してくれれば、事は容易なんだ……どうだ。賛成してくれるか……」

「さうさ……趣意は大に賛成だが、君達がそれを思ひ立つた動機だね。それを聞かないと、うつかり同意は出來ないね。あとで迷惑するのは厭だからな……」

山田は笑ひながら、冗談のやうに言つた。

「大丈夫、君が迷惑する筈はない。吾々の動機は神聖なものだ。これから吾々が活社會へ出て行くについては、是非とも異性といふものを知つて置かなければならない。また女の方から言つてもさうだ。男といふものを理解しないで、世の中に立たうつたつて、それは無理だ。それには、公開的に兩性の接觸を計るのが公明正大で一番好い……とかう言ふのだ。」

木村はまじめくさつてこんなことを言つた。併し、木村の

目的が單に女に近づくこと――そして、あはよくば青春の享樂をそこに見出ださうとすること以外に何もないことは、その詞の内容にも表現にもよく分かつてゐた。

山田は十分それを看破してゐながら、決してそれを反駁しなかつた。

「成程、それなら立派な動機だ……宜しい。僕も賛成しよう……ところで、烏丸や東谷はどうなのだ。」

「なあに、あの輩は賛成してくれたところで、たいした信用にはなりはしないんだが、今まで顔ばかり見てゐて口の利けなかつた女の連中と口が利けるつてんで、からもう大喜びなんだ……」

「ふうむ……」

山田は尻上がりに鼻で笑つたが、心の中では自分だつて同じことだと思つた――山田は「失つた愛」にまだ全く執着を絶つたのではなかつた。彼は若しよそ眼にも戀しい「人妻」の姿が見られればと思つたのである……それは勿論、以前と同じ執着ではなかつた。我意のみの執着ではなかつた……少くとも、千駄ケ谷へ通つてゐる間は、その「戀人」の面影さへ眼には映らなくなつてゐた……三澤に會ひ、林に責められ、森川先生の文章に自分の信仰の弱點を突かれて、山田は折角進んで來た道を又幾歩かあとへ戻つた……そこに立つて待つてゐたのが、もう近づかうとして近づくことの出來ない「過去の愛」であつた……もうそれは「戀」ではなかつた……女としての「愛」ではなかつた……親しい友達のやうな……仲の好い同胞のやうな……その懷しさ慕はしさを押さへることは出來なかつた……

「ぢやあ、これで好い。先輩の方はもうみんな賛成が得てあるんだから、教師連中の意向さへきまれば直ぐ發表出來るのだ……有難い、有難い。」

木村は額を打たぬばかりにして喜んだが、やがて急に何か忘れたことでも思ひ出したやうな顔をした。

「さうだ……若し、この話がきまつたら、當日餘興に何か品の好い素人芝居をやりたいと思ふんだが、その時は脚本のことだの、稽古のことだの、萬事君に賴むから、そのつもりでゐてくれ給へ……」

「ほう。そいつはなかなか大事業だね。」

「どうせやるなら、その位なことはしなけりや詰まらないよ……男女混合でやるんだ……面白いぜ……東谷なんか、まだなんにもきまらない内から、もうすつかり出るつもりで、役者氣取りでゐやがるんだ……」

「あいつは、そんなことならチヤンピヨンだ……」

「その癖、不器用なんだがな……」

二人は聲を合せて笑つた……

その時分、青年少女の交際は――今考へると滑稽なほど

――世間で嚴しかつた。若い男と若い女の間には――それが同胞か親戚でない限り――單に物を言ふことさへ容易に許されなかつた……

木村や東谷や烏丸が男女合併の同窓會などといふものを思ひついたのも、畢竟さうした不自然な束縛に反抗する苦肉の策に過ぎなかつた。

勿論、事は容易に運ばなかつた。木村や烏丸や東谷は、別に用のない體なので、毎日朝から晩まで奔走した。初めは局外にゐるつもりでゐた山田も、あんまりみんなが一生懸命なので、しまひには見るに見かねて、手傳ひ始めた……

かうして、曲がりなりにも、學校側、男子部女子部の幹事連の間にも、やつと諒解が得られた。木村は直ぐと發起人の名をきめて――出身者で、なるべく社會的に地位のある人達の名を列べて――趣意書の起草、その印刷、會の日取及び會費の決定、當日のプログラムの編成などに從事した……

餘興には「水沫集」の中にあるハツクレンデルの小說で「黃綬章」といふのを芝居にしてやることになつた――山田はそれを脚本に書き直すことから、有志の人に役を振つて、稽古をすることまで引き受けた……

誘惑はそこにあつた……山田の妹と同じ年度に小學校を出た女生の一人に、東北の或資産家の娘があつた。勿論、田舍には宏大な家と土地とを持つてゐたが、東京にも立派な屋敷があつた。娘には二人の姉と二人の妹とがあつた。五人の姉妹は病身の母を故郷に殘して、多額納税議員として東京に用事の多い父と一緒に、小さい時から麴町の御厩谷に住んでゐた。五人の中で、山田の妹と同級の松子が一番美しかつた。學校の成績は著しく好くはなかつたが、頭腦の明晰で、理解の早いことは教師達の驚異の一つであつた……

松子は小學校を出ると、他の姉妹を東京に殘して、自分一人だけ故郷へ歸つた……それから三年程立つて……最近また東京の屋敷へ歸つて來た……山田は妹の友人の一人として、顔ぐらゐは前から知つてゐたが、いつ田舍へ歸つたのか、いつ又東京へ出て來たのか、そんなことはまるで知らなかつた――美しい人だとは思つてゐたが、山田は松子に心を惹かれるやうなことはなかつた……

その松子……どつちかと言へば、日本風な嚴格な家庭に育つた、氣の小さい、羞恥に富んだ松子……それが意外にも――山田の妹を通して――自分から「黃綬章」の役者の一人になりたいと申し込んで來た。

「……愉快、愉快……もうこれだけでも吾々の趣意は徹底したといふものだ……あんなお孃さんが――しかも、あんな大家のお孃さんが、進んで餘興の一役を引き受けようといふ氣になつたこと――そのことだけでも、吾々の爲事はもう無意味でなくなつたのだ……」

木村や東谷はかう言つて、有頂天になつたが、山田は思ひの外冷靜だつた――

「たとひ餘興でも、藝術は藝術だ。いくら綺麗な人でも、その方の才能がなければ駄目だ。一つ稽古をして見て、物になりさうなら便ふし、物にならなさうだつたら、遠慮なく斷らうぢやないか……」

試驗をして見ると――と言つても、山田に少し眼があるだけで、立ち合つた木村や東谷には、まるでその方のことは分からなかつた――果して、松子には餘り天分がなかつた。

それでも、木村は松子が美しいので、これに好い役を與へようとしたが、山田は諾かなかつた――結局「隣の女房」といつたやうな極めて小さな役が松子に與へられた。

山田は役者としての松子にあまり重きを置かなかつたやうに、人間として松子にもあまり注意を惹かれなかつた――もともと妹の友達ではあり、こんなことが緣になつて、山田の家へも足しげく出入するやうになつたが、山田はやつぱり妹の友達といふ以上に濃い感じは持たなかつた……

同窓會の當日が來た……

山田がおぼろげに――しかも心の中では可なり力强く――待つてゐたものは終に姿を見せなかつた。山田は「待つてはならぬもの」を待つてゐたやうな氣もするので、悲しむことも絶望することも出來ないやうな氣がした。

物足りない――併し、物足りないと思つてはならないといふ心持――それが山田の元氣を挫いた。山田は心の虚な器械のやうに自分の役目だけを果した……

「おい。ひどく意氣消沈してるぢやないか。Tが來ないんでがつかりしてゐるんだな」

「好い加減に諦めろよ。もう人の細君ぢやあないか。」

「從六位功四級海軍機關少佐の令夫人と來ちやあ、吾々側へも寄りつけないからな……」

木村や東谷や烏丸は、事情の外部的な一面をのみ知つてゐて、容赦もなくこんな冷嘲を浴せた。それでも、山田は怒る勇氣もない程氣を滅入らしてゐた……

餘興の芝居が始まつた……

山田はするだけのことをすると、見物席の一番うしろに立つて、ぼんやり見た……

なんにも感興を惹かなかつた……老母に扮した自分の妹の子供のやうな可愛らしい聲も、息子に扮した烏丸の甘つたれたやうな詞つきも、稽古の時ほど氣にならなかつた……無事に進んだからではない――見物席には屢笑聲が起つた――山田自身が氣を入れて見てゐなかつたからである……

暫くすると、突然、山田が眼を見張つた……松子が舞臺へ出て來たのである――あれ程山田が輕く見てゐた松子は、實

に驚くべく生き生きした扮裝をもつて舞臺へ現れて來たのである……

それはいつもの松子とはまるで別人だつた。すらりとした、丈の高い姿が、始めて著たとは思へない程、洋裝を適はしく見せた。それよりもいつもは死んだやうな日本風な松子の顏の美しさが、悉く命と力に充ち滿ちてゐた……

眼も……口も……鼻も……耳も……いつものそれらとは全く違つてゐた――總てが生き生きと動いて、深い生活の陰影を持つてゐた……

短い詞――それにも、思ひの外な濕ひと深みとがあつた……

山田は見てゐる内に、自分の顏の熱つて來るのを感じた。自分の心臟の高く波を打つて來るのを覺えた……

「誘惑だ……」

山田は咄嗟にさう思つた。

「おれは單に容姿の美にうたれたのだ……おれの信仰のぐらついて來てゐるところを狙つて、悪魔がおれを誘惑するのだ……」

講習會が濟んでからも、續けて日曜毎に森川先生の說教を聞きに行つてゐた山田は、先づ普通の基督信者が考へさうなことを考へた……

「だが、容姿の美といふものが單に容姿の美として存在し得るものだらうか。自然の美の蔭には神の聖意の美しさがある。人間の姿の美しさも、心の美しさなしに在り得るだらうか……

「成程、おれは常に美しいものに憧れてゐる。併し、單なる形態の美に對して、頰をほてらせ胸を躍らせるほど物質的な人間ではないと信じてゐる……おれが動かされたのは、あの美しい眼や口の蔭にある美しい心に對してでなければならない……」

山田はさう考へて少し安心したが、續いて又叱るやうな聲が心の底から起つて來た……

「それにしても何といふ輕薄さだ。お前は死ぬほど愛してゐたものと別れてから、まだ一月立つか立たない内に、もう又新しい愛の對象を求めようとするのか……」

「いや、決して自分から求めたのではない……」

心の底で反抗するやうな別の聲が起つた……

「……招かないで來たのだ……自然と自分の前へ現れて來たのだ……それに、これはまだ戀といふものだかどうだか分からないのだ……おれは唯意外な美に出會つて、烈しい感動を覺えただけだ……恐らく戀ではあるまい……いや、斷じて戀ではない……」

山田は樣々に自分で問ひ自分で答へたが、一度松子に惹かれた心は、容易に松子を離れなかつた。

木村や東谷は、至難な男女合併の同窓會を無事に濟ますことが出來たので、有頂天になつて喜んだ。會の後始末と稱して、その後も幾度か女子部の幹事連と會合した。そして、その會合を樂しんだ。山田もさういつた會合へは出たが、いつも松子がゐないのを物寂しく感じた。今後續けてかうした同窓會を開くことに就いても、木村や烏丸は熱心に女子部を說いたが、山田はもうそんなことはどうでも好かつた…

木村の謂はゆる「後始末」――實は女子部の幹事に出來るだけ多く接觸する爲の「後始末」だつたが――もすつかり濟んで三日程すると、松子が山田の家を訪ねて來た。

山田の妹は留守だつた。いつもは妹が留守だと直ぐに歸つて行く松子が、その日は「若しお兄さんが入らつしやるなら……」と言つた。山田もそれまでは、妹の留守の時、松子に上がれと言つたことは一度もなかつたが、その日は不思議に會つて見たくなつた。

松子は女中に案內されて、淑かに山田の書齋へ通つた。餘興劇の「扮裝」で今までとは全く別な感じを山田に抱かせた松子は、飾りのない素の儘の姿でも、今までとはまるで違つた感觸を山田に與へた。

山田は自分で自分の心を疑つた。「扮裝」に於いて一度惑はされた自分の眼は、いまだにまだ惑はされてゐるのだらうか。それとも、自分は今までこの人を全く見違へてゐたのだらうか。子供の時の樣子だけが眼に殘つてゐて、大人になつた今の松子を、自分はまだ注意して見なかつたのだらうか……

兎にも角にも、今山田の前に坐つた松子は、以前の松子とは、全く別の人間だつた……

黑勝な、利口さうな、それでゐて深く沈んだところのある眼……筋が通つてゐて、少しも驕りの見えない鼻……小さ過ぎもせず大き過ぎもしない口……男性的な濃く太い眉毛……それを和げるやうに可愛らしい、血の色の透き通るやうな耳……どれもこれも、今までの松子には全く見られないものだつた……

併し、それらよりも山田の心を强く惹きつけたのは、松子の服裝だつた――そして、その服裝の後に窺はれる松子の心だつた……

およそ飾りのないと言つて、山田はこれ程飾りのない女を見たことがなかつた……松子はまだ十八だといふのに、うすい藤色の無地の襟をかけてゐた。帶も黑い無地の方を出して締めてゐた。學生の山田には柄も物も分からなかつたが、著物も鼠つぽい、僅に細い縞目の見える、一向人の眼につかぬやうなものだつた。頭にも彫のある小さい銀の響を一本深く突きさしたきりで、他になんにも飾りはなかつた……

「光」にも「色」にも、決して人の注意を喚ばうと企ててゐるものはなかつた……道端の草の葉の蔭につつましく咲く薄

色の小さい花……われから人の眼につかぬやうにつかぬやうにと水の底深く沈んでゐる鈍色の寂しい魚……どこに人を迷はさうとするやうなところがあらう……どこに誘惑があらう……

山田はかくも淑しいものを「誘惑」だと思つたことを恥ぢた……このやうな神々しい境に惡魔が棲んでゐるなどと思つたことを悔いた……

唯ぼんやり見ても……俗人の眼から見ても……それは決して百萬長者の令孃の服裝ではなかつた……山田は同窓會の當日、松子の姉妹達の美々しく著飾つた姿を見てゐた……それとこれとはまるで別の國の人のやうだつた……

山田は松子の生活の蔭に、何か他の姉妹とは――姉妹ばかりではない。同じ年頃の總ての他の娘達とは――違つたものがあるのではないかと思つた……物寂しいとりなり、深く沈んだ眼の色、そこには見逃し難い憂鬱と賴りなさとが見られた……

「……千枝子さんはどちらへ入らつしやいましたの……」

「お茶の稽古に行つたんでせう。」

「……お歸りになるまで、お兄さんのところでお邪魔させて頂いても宜しいでせうか……」

「ええ、どうぞ……」

「……あたくし、お兄さんにいろいろ敎へて頂きたいことがございますの……」

二人はぽつりぽつりこんなことを話した。松子の聲は淸く澄んでゐたが、しかも憂に沈んでゐた……

「僕はまだ學生です……人に敎へるなんてことは出來ません……」

「でも、お兄さんは信仰を持つて入らつしやるやうに聞いてをりますわ……」

「信仰……どこでそんなことを聞きました……飛んでもないことです……信仰なんて……いつになつたら、そこまで行けるか分かりません……」

「でも、求めては入らつしやるんでせう……」

松子は特別に人の氣を惹くやうなことを言ふのではなかつた。併し、その言ふことは最初の一言から、當時の同じ年頃の他の娘達とは違つてゐた――しかも、その語調には些の飾り氣もない眞劍さがあつた……

「……求めてゐます……實は求めて一度得たと思つたのですが、それは自分で自分の影を捉まへたに過ぎませんでした……僕はまた新規に出直しました……」

山田も飾らずにかう答へた。

「あたくしを、そのお連れになさることは出來ないでせうか……」

「さあ……」

山田は即答が出來なかつた。

「實はあたくし、お兄さんに導いて頂きたいと思つて上がりましたの……それで、けふは千枝子さんがお留守でも、お兄さんには是非お目にかかりたいと思つて參りましたの……」

「飛んでもないことです……導くなんて、到底今の僕に出來ることではありません……僕自身、僕を導いてくれる人を求めてゐるくらゐです……人を導くなんて、考へても恐ろしいことです……」

「でも、お兄さんには森川先生といふ方が入らつしやいます……あたくしの森川先生はお兄さんです……」

山田は松子が思ひの外に自分のことをいろいろ知つてゐるのを驚くと同時に、その要求の自分を責めるやうなことばかりなのを驚いた——

「愈、飛んでもないことです……僕があなたの森川先生だなんて……どうして、そんな資格が僕にありませう……僕のやうな意志の薄弱な、僕のやうな感情の濁つてゐる、僕のやうな我儘な人間と一緒に歩いたら、横道を迂廻するばかりで、容易に本道へは出られません……若し、眞實にあなたに求める心があるのなら、あなたは直接森川先生に導いて貰ふか、さもなくば御自分一人で出發なさることです……僕は駄目です……僕は駄目です……」

「その、僕は駄目だとおつしやるところが、あたくしお慕はしいのです……かういふと生意氣なやうですが、木村さんや東谷さんは、いろんな點から見て、お兄さんよりはずつと人格の低い方達です……それでゐて、御自分達が駄目だとは思つて入らつしやいません……」

「いや。人格の高い低いなどといふことは外見だけでは分かるものではありません……成程、あの連中は學校も正式にやらないし、これといふ目的もなしに遊んで暮らしてゐます……併し、人間としての價値に於いて、僕とあの人達との間に、どれだけの相違があるでせう……僕は子供の時分から、あの連中と親しくして來ました……今でも可なりな親しみを持つてゐます……みんな善人です……友情に厚い、心の優しい人達です……」

「ほんとに、お兄さん、さう思つて入らつしやるんですか……」

「ほんたうに、さう思つてゐます……」

山田は誠を面にあらはして言つた。

松子は暫くぢつと山田の顔を見詰めてゐたが、やがて感に堪へたやうに、

「ですから、あたし、お兄さんに導いて頂きたいと思ふのです……どうして、お兄さんはさういふ清い心を持つて入らつしやるのでせう……あたくしのやうな心の曲んだものは……」

と言ひかけて、ぷつりと詞を切ると、急に暗い顔をして下

を向いてしまつた。

「木村や東谷に何か惡いことでもあるのですか……」

山田は松子の顔をまじめに見詰めて、心配さうに訊いた。

「……いいえ、これと言つて特別に惡いことがあるわけではありませんけれど、あの方達がこんだのやうな計畫を遊ばしたについては、女子部でもいろいろに申してをりますわ……家の一番上の姉なども、ふだんはあんな風に無口な人ですが、こんだだけは隨分反對したらしいのです……あの方々の思ひ立ちが純でないと申すのですね……贊成して、會を開くにしても、幹事連中は油斷をせずに監視してゐなければならないなんて申したさうですの……今度の會が出來たのは、全くお兄さんの信用が女子部にあつたからですわ……發起人の中にお兄さんの名がなければ、會はなり立たなかつたに違ひないなんて、姉は申してをりました……さういふ風ですから、あたくし達までが木村さんや烏丸さんや東谷さんに對しては、始終警戒するやうにしてをりましたわ……」

「なんだ……唯それだけのことですか……それだけのことならあの人達だつて僕だつて同じことです……危險な點に於いては、寧ろ僕の方が危險でせうぜ……やつぱり女には上邊のことしか分からないのですね……」

「いいえ。いくらそんなことを仰しやつても、あの方達とあなたとは全く別ですわ……それは、誰でも認めてをりますわ……それだのに、お兄さんはあの人達のことを今のやうに仰しやるのでせう……あたくし、ほんとに感心いたしましたわ……」

「それは僕が純なのでも何でもありません……女の人は猜疑が深いのです……」

「さうです……ですから、あたくし自分で自分が厭になるのです……どうして、あたし達はこんなに曲がつた心を持つてゐるのでせう……」

さう言つて、松子はまた下を向いてしまつた。

「さうかなあ……あなたのやうな何不足のない生活をしてゐる人でも、女はやつぱりさうなのかなあ……」

山田は獨語を言ふやうに言つた。

松子はそれに對しては、一言も返事をしなかつた。唯、顏を上げて、物悲しげにぢつと山田の顏を見た——併し、その黑く潤んだ眼には、明かに山田の詞を否定する色があつた。

山田にはそれが分からなかつた——小學校を出てから三年の間、田舍の方へ行つてゐて、何の消息もなかつたといふことに就いては、何か事情がありさうでもあつたが、自分の家などとは比較にならぬ程立派な家に生れて、何不自由なく暮らして來た松子に、そんなに暗いことがあらうとは、どう考へても想像出來なかつた……

それでも、山田は松子の悲しげな眼を見てゐる内に、自分

の心の重く沈んで來るのを感じた…そんなわけはない、そんなわけはないと思ひながら、松子が何となしに可哀さうになつて來た…

「…松子さん、あなたは學校を出られてから、ずつと田舎の方へ行つてをられたのださうですね…」

山田は訊くともなく、かう訊いた…

「…はい。丁度三年…つひこの五月に又こちらへ參つたのです…」

「もうずつと、こちらにお出でになるんでせう…」

「さあ。どうですか…分からないのです。」

「あなたは御自分の意志では動けないのですか。」

…餘計なことだとは思つたが、山田はかう訊いて見た。

「まあ…さうでせうと思ひます…」

と、松子は寂しげに笑ひながら答へた。

「大家のお孃さんなんて、みんなさうしたものでせうか…」

「あたしはお孃さんではありません…水も汲みましたし、庭も掃きました…」

「それは田舎ででせう。」

「ええ…」

「それでは駄目です…」

「駄目でせうか。」

「駄目ですとも。」

松子はまじめに落膽して、首を垂れた。

「一體、あなたのお國はどちらですか…なんでも、日光の方だといふことは聞いてゐましたが…」

「山の中ですわ…」

さう言ひながら、松子はやつと又顔を上げた。

「ふゝといふところです。」

「え。」

山田は今までに聞いたこともない土地の名を聞いた…

「そこに、下屋敷があるんですね。」

「いいえ。そこが本宅なのです。」

「御本宅には、どなたか身内の方が入らつしやるのですか…」

「ぢぢいとばばあがをります…それに、母が病身で、大抵行つてをります…」

「それぢやあ、寂しいことはありませんね…」

「ええ…」

と言つて、松子は暗く笑つた——答は肯定だつたが、この笑は明かに否定だつた。

「でも、三年もゐたら倦きるでせうねえ…」

山田は慌てて取り繕ふやうに言つた。

「でも、物を考へるにはようございますわ…しづかで。」

松子の顔には、もう暗い影が見られなかつた。

「そりやあ好いでせう…併し、松子さん、あなた、そんなに何か考へることがあるのですか…」

「そりやあ、ありますわ…」

「たとへば、どんなことを…」

「さうですね …人間はなぜ生きてるんだらうなんて問題を…」

松子は輕々と言つた——まじめだか笑談だか分からない程輕く言つた。併し 山田は眞劍だつた。

「それは大問題だ …まだ僕などにはなかなか分からない問題です…」

「まだ、ありますわ…愛はなぜ制限されるのだらうなんて問題もあります…」

「むづかしい問題ばかりですね。」

「でも、それが分からないと困るのですもの…」

松子は子供が甘えるやうに言つた…

松子は山田の妹の歸らない内に歸つて行つた——ひとりあとへ殘された山田は、言ひやうのない物寂しさを感じた…

「おかしいなあ——おれは松子を愛してゐるのかしら…」

山田はさう思つた…

「いや、いや、そんな筈はない…そんな筈があつてたまるものか…」

山田は直ぐと否定した…

妹が歸つて來た…山田はすぐと妹の口から松子のことが聞きたかつた。妹とふたりで、すぐと何か松子の話がしたくなつた——

「松子さんが來たよ …しばらく君の歸るのを待つてゐたが、君がおそいので、歸つて行つた…」

「でも、松子さんは兄さんに會ひに來たのでせう…」

妹は何の邪氣もなしに言つた。

「僕に…」

「ええ。こなひだから、一ぺん兄さんに會ひたいつて言つてゐましたもの…」

「僕に何か用があるのかしら…」

「信仰の話が聞きたいつて言つてゐましたわ…」

「ふうむ…」

「それに、信樂さんのことにも隨分同情を寄せてゐましたわ…」

信樂 それは山田が「失つた愛」の名であつた…

「誰にそんなことを聞いたんだらう…」

「あたし、訊かれたから、話したわ…」

「お前が話したのか…」

「ええ…」

「しやうがないな。」

とは言つたが、山田は怒つたやうな顔もしなかつた…

「あの人はなんだか寂しさうな人だねえ…」

暫くして、山田が獨語のやうに言ふと、妹はいつもの率直さで、

「ええ…あの人、氣の毒な人よ…」

と、言つた。

「どうして…あんな家のお嬢さんでゐながらか。」

「ええ…あの人、お妾の子ですもの…」

「妾の子…」

「ええ。五人姉妹の内、あの人がまん中で、あの人ひとりだけお妾の腹なの…」

「そのお妾は今でもゐるのか…」

「お松ちやま…あすこの家では、みんなさう言ふのよ…お松ちやまのお母さんはお松ちやまを生むと、すぐ死んでしまつたんですつて。だから、上の姉さんがぼんやり知つてるぐらゐなもので、他のきやうだいはなんにも知らないんですつて…」

「ぢやあ、別に松子さんが虐待されるといふやうなこともないんだらう…」

「ほかの姉妹と少しも違はない待遇を受けてゐるのですつて…それだのに、どういふもんだか、小さい時からあの人の方で遠慮するんですつて、お妾の子だか何だか自分でも知らない時分から遠慮するくらゐだから、大きくなつて、それを知つてからは尙と尻込をする人になつてしまつたんですつて…小學校を出てから、田舍へやられたのも、お父さんがもつと伸び伸びさせたいからつて仰しやつたからなんですつて…」

山田の妹は松子とおない年だつた。併し、山田の眼から見ると、妹の方が松子よりずつと子供に見えた——その子供のやうな、飾りのない、すかすかした、妹の話を聞いてゐる内に、山田はだんだんはつきり松子の姿を心の内に描くことが出來た…

やつぱり寂しい人だつたのだ…小さい時から寂しい子だつたのだ…人の中にゐて、人と明かるく親しめない女なのだ…眞僞は分からないが、若し姉妹五人の内で、あの人ひとりが腹ちがひだとすれば、さうなるのも無理はないと山田は思つた…

山田の心の内に描かれた松子の姿は、唯描かれただけでは濟まなかつた…その姿はだんだん山田の心の底に滲み徹つて、そこに消さうとしても消せない繪を作つた…

松子はその明くる日から、毎日のやうに山田の家を訪ねて來た。松子の訪問の目的が山田の妹になくて山田にあることが、だんだんはつきりして來た——松子はいつも山田が學校から歸つて來る時刻を計つてはやつて來た。日曜は森川先生のところの會合から歸る時分を狙つて來た。

山田の妹が家にゐても、決してそれを邪魔にするやうな樣子はなかつた。併し、妹が留守でも、一向それを不滿足に思ふやうな樣子もなかつた——

「お松ちやまは兄さんの友達になつてしまつたのねえ…もうあたしなんか、ゐてもゐなくても好いのよ。」

「馬鹿あ言へ…そんなことがあるもんか。」

兄妹がこんな冗談を言ひ合ふやうになつた。

松子は來るたんびに、きつと何か一册、本を借りて歸つた——それは主に思想とか宗教とかに關する本だつた——

「お兄さんがお讀みになつて、好いとお思ひになつた本を、あたしみんな拜見したいんです…」

松子はこんなことを言つた。併し、詩集や小說は、山田が勸めても、あまり熱心に讀まなかつた。主に持つて歸るのは森川先生の著書だつた——

「森川先生つて、隨分豪い方なんですねえ…」

「豪い人ですとも…」

「お兄さんは隨分尊敬して入らつしやるのねえ…」

「してゐますとも…今のところ、僕を導いてくれる先生は、あの先生一人です。僕は先生の言はれることに、徹頭徹尾服してゐるのです…」

「どんな方なんでせう…」

「顏容ですか…」

「ええ…」

「どつちかと言へば、恐い顏です…それでゐて、少しでも笑ふと、無限の優しみが溢れて出て來ます…先生の書齋にフイツスラアのかいたカアライルが横向きに椅子に腰をかけてゐる全身の肖像が掛かつてゐますが、それがよく先生に似てゐます…」

「女の方でも、先生のところへ入らつしやる方がありますか…」

「ありますとも…先生はちつとも恐い人ぢやないんですから…」

「でも、あたし、なんだか恐い方のやうな氣がしますわ…」

二人は時々こんな話をした。

（背教者前篇終）

新選小山内薫集
定價金壹圓

昭和三年八月一日印刷
昭和三年八月三日發行

著者 小山内薫
發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四ノ六
印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

共同印刷株式會社印刷

版權所有

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地 改造社
振替東京八四〇二番
電話芝 一一一一番 一一一二番 一一一三番 一一一四番

新選名作集

新選 谷崎潤一郎集

神童○鼠○惡魔○續惡魔○あくび○ The affair of Two Watches ○前科者○異端者の悲しみ○人面瘡○二人の稚兒○玄奘三藏○ハツサン・カンの妖術○柳湯の事件○富美子の足○ちひさな王國○覆探○脫ぱれた戯曲○或る少年の怯れ○母を戀ふる記○兄弟○恐怖

四六判並製 八ポイント二段組 六〇六頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 菊池寛集

小說 藤十郎の戀○船醫の立場○笑ひ○亂世○復讐○仇討三態○恩を返す話○三浦石衛門の最後○頑絵り上人○西南奇聞○抗議書○神の如く驕し○死床の願ひ○島原心中○晩年○たちあ姫○羽衣○戯曲論討以上○茅の屋根○畳太郎○奇語○海の苦屋○玄宗○心持○世評○貞操○戀愛病患者○兄の場合（舞臺に立つ妻○ある兄弟○時の氏神○順番○溫泉場小景○火事○長篇小說 火事

四六判並製 八ポイント二段組 五九二頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 前田河廣一郎集

三等船客○脫船以後○赤い馬車○墓窖地獄○裏切る者○ストライキ中○麻痺○夢威○十三段の階段○佐吉の父親○手○慈善○海の女○盜人○瓦斯タンク○エレナの話○ドウリスの話○メイの話○日蝕者○「ダンプロ」○太陽の黑點○故郷○餓鬼○海の輕業○スキヤツプ○ムツソリーニ

四六判並製 八ポイント二段組 五一六頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 永井荷風集

歡樂○夢の女○深川の唄○あの人達○新論朝者日記○花瓶○藍獄者の夢○小品集 春のおとづれ—花より雨に—夏の町—狐—傳通院—下谷の家—樂器—日本の庭○縫衣花笠森○ふらんす物語 舟と車—ローン河のほとり—秋のちまた—蛇つかひ—晩餐—祭ゝ夜がたり—霧の衣○おもかげ—再會—ひとり旅—雲—巴里のわかれ—緑の露葉其他○珊瑚集（佛蘭西近世抒情詩選）ボオドレエル—外十二篇○江戸趣術論 浮世繪の感賞外九篇○大窪だより

四六判並製 八ポイント二段組 五三六頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 藤森成吉集

短篇小說○雲雀○古匣二篇○娘○研究室で○山○子供○床甚○風○故郷を去るまで○東京へ○雀の來る家○鳩を放つ○路上○地主○こぼろぎ○北見○拍手しない男○鈴の感謝 戯曲 蟻牲○磔茂左衛門○何が彼女々をそうさせたか？○親友○夫婦 長篇小說 舊先生○妹の結婚

四六判並製 八ポイント二段組 六七八頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 葉山嘉樹集

長篇小說 海に生くる人々 短篇小說○淫賣婦○誰が殺したか○別離○疫害○出しやうのない手紙○セメント樽の中の手紙○むこたら貧しい出來事○遺書○支那人の擬○馬鹿を見たけやこいつらを見て○獄の半日○正札付貞婦人○刺された男○眼○勞働者の居ない船○そりや何だ○住むべき處を求めて○冷たい○赤い荷札○春の惱み○○○焼けた金で拂ふ○田舍者が都會を見る○追跡○稀有○校正係○櫻の咲く頃○浚渫船○ポプラ○乳色の靴○プロレタリヤの乳○マドロスと最○生爪を剝ぐ○死屍を食ふ男○無風帶を行く船○船の犬「カイン」○火夫の顏と水夫の足○電燈の油○鼈蟹

四六判並製 八ポイント二段組 五三一頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 北原白秋集（詩篇）

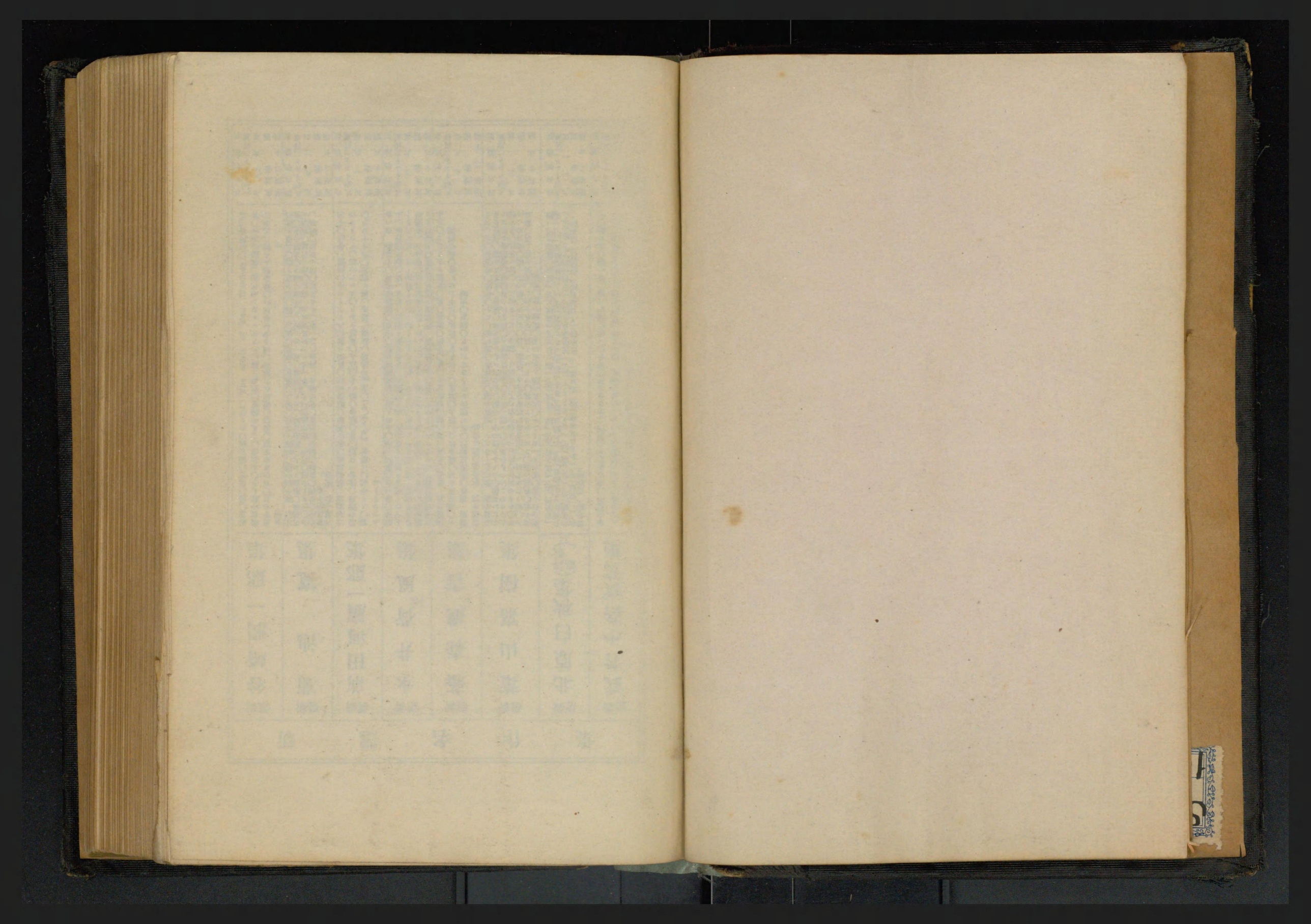
「邪宗門」抄。「思ひ出」抄。「雪と花火」抄。「畑の祭」抄。「日眞珠」抄。「日本の苗」抄。「眞珠」抄。「白金の獨楽」抄。「蛇の電報」抄。「水墨集」抄。「秋の鄙歌」抄。「とんぼの眼玉」抄。「花咲爺さん」抄。「祭の笛」抄。「まざあ・ぐうす」抄。「花咲爺さん」抄。「子供の村」抄。「象の子」抄。「からたちの花」抄。短歌抄。口語歌抄。長歌抄。詩文抄。俳句抄。詩論抄。

四六判並製 八ポイント二段組 六〇一頁 定價壹圓 送料二十錢

新選 武者小路實篤集

▼（長篇）○或る男○▼（短篇）○小さき世界○芳子○一休に聞いた話○友の話○へんな原稿○ユダの辯明○ヨハネ・ユダの辯解ゝ聞いて▼（戯曲）桃源にて○日本武尊○二十八歳の耶蘇○佛陀と孫悟空○ある青年の夢○父と娘

四六判並製 八ポイント二段組 六五二頁 定價壹圓 送料二十錢



582
157